

あるむぜお

府中市郷土の森だより

No.22

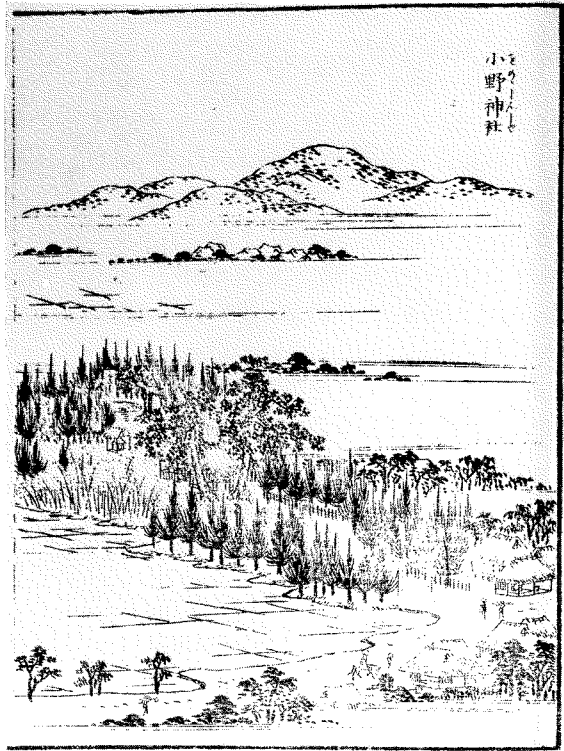
al museo

武蔵野の風景7『江戸名所図会』より

小野神社

かつて橋のなかった多摩川には、いくつもの渡し場がありました。冬になり水かさが減ると、地元の人たちは丸太で仮橋を作りました。燃料の薪や肥料の落ち葉を集めに、府中から対岸の向山に出かけるのです。広い川の流れも、両岸の人々をささげる溝とはなりません。

多摩川をはさんで府中市住吉町と多摩市一ノ宮の両方に小野神社があります。「武蔵国一の宮」といわれる由緒ある神社で、どちらが本家であるかはさておき、興味深いところ



です。府中の側に奈良・平安時代の国府の大集落があつたのに対し、対岸の小野神社の背後には、近年落川遺跡として発掘が進んでいる集落がありました。平安時代の『和名類聚抄』に出てくる「多磨郡小野郷」の地名も、このあたりに関係するのでしょうか。

2つの小野神社を川を越えて結んで、さらに六所宮（大国魂神社）へ続く小さな古い道が知られています。六所宮の例大祭に向う一の宮の神輿が通ったのかも知れません。絵は現府中市の、写真は多摩市の小野神社です。 (〇)

企画展 ウメの開花と気象

展示会案内

平成5年2月7日(日)～3月7日(日)

ウメの花は、毎年いつごろ咲きはじめるのでしょうか。おなじみのサクラの場合と同じように、ウメも「開花日」のデータが調査されています。開花測定されるウメの木(標本)は、花弁が5弁で、他色の混じらない白い花のものが選ばれています。東京の場合は、世田谷区の東京農業大学構内のウメです。開花日は全国約100か所の気象台が調査し、これを元に毎年気象庁から発表されます。

また、1961年から90年の30年間の平均値から平年の開花日も気象庁から発表されています。この資料は10年ごとに更新されます。ふつう、目安として標本の花が数輪以上開いた日を「開花日」、80%以上開いた日を「満開日」とします。ただ「満開日」を観測しているのはサクラだけです。

こうして作られた「開花前線図」(下図)を見ると、1月中旬に開花する地域は九州南部から四国、近畿・東海・関東地方の太平洋南岸で、東京付近は2月10日前後が平年値です。

一般に、ウメの開花予想はたいへん難しいと

されています。開花の2か月前の気温と関係があるらしく、12月・1月が高温多湿なほど早く咲くようです。

さて、今度の郷土の森のウメはいつほころびることやら。春を最初に告げてくれる花だけに、今から気になるところです。

展示会では、ウメやサクラのほか、季節観測の対象となる植物や昆虫の標本や調査のさまざまなデータを紹介します。梅講座も合わせてご参加ください。(I)

郷土の森の「梅まつり」

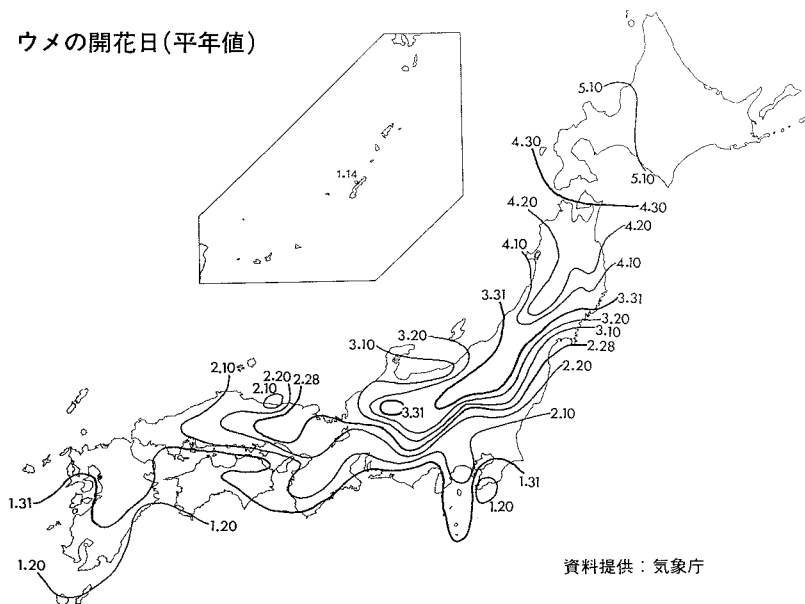
2月7日(日)～3月14日(日)予定

梅講座

- ①2月14日(日) ウメの開花のしくみ
講師：大坪孝之氏(東京農業大学)
 - ②2月21日(日) ウメの開花前線と気象
講師：矢花和一氏(財団法人日本気象協会)
- いずれも午後2時から。博物館大会議室

期間中、琴尺八演奏会や野点茶会も行います。

ウメの開花日(平年値)



武蔵国府のはなし その3

何はともあれ、国府設置場所にこの府中が選ばれ、都から国司が派遣され、8世紀前葉には役所が建設されました。

—国の役人—

国司は、一国の行政・警察・司法・宗教など絶大な権限をもっていました。21郡もある広大な武蔵国の場合、国司の定員も多く、かみ すけ守・介・大掾・少掾・大目・少目という役職がありました。彼らの任期は一般に4～6年で、彼らを補佐する3～5人の史生も都から派遣されていました。さらに、現地で採用された下級役人が500人ほどいて、雑務にあたっていました。

—国の役所—

国府の一角には、彼らが執務する様々な役所が建てられていました。なかでも、重要な政務や儀式を行う場が政庁と呼ばれる施設で、各地の発掘調査によって、ついでい築地塀で囲まれた中にひととき大きな建物が建ち並び、かわらぶき瓦葺きの建物もあったことがわかっています。

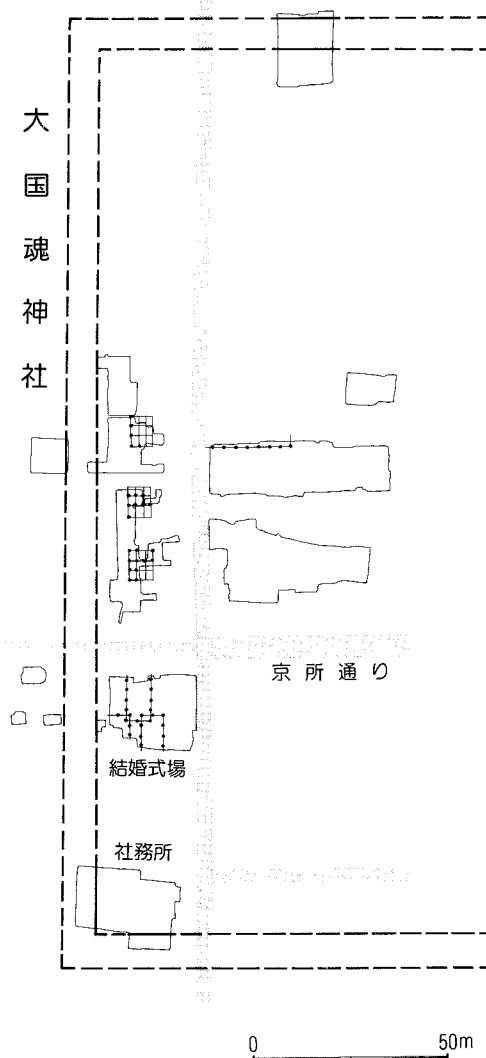
府中では、大国魂神社東側の宮町2丁目一帯で大型の掘立柱建物や礎石建物の跡が見つかっていて、長さが20m以上の大きなものもあります。いずれも建替えられたこんせき痕跡があり、建物の跡が重複していますので幾度が改修も行われたようです。ここからは瓦も数多く出土しますので、瓦葺きの建物もそびえていたのでしょう。建物群の周りには大きな溝が巡っていて、周辺と隔離された場所であったことがわかります。

現時点では、一つ一つの調査面積が狭く、調査か所も少ないため、建物の規模や配置、政庁の位置などについてははっきりしませんが、この一帯に政庁を中心とした役所が建ち並んでいたことは間違いありません。出土する瓦の中には、国内の郡名を記したものがありますから、役所の建設にあたって、各郡が分担して瓦を納めていたことも想像できるのです。

—国司の館—

立派な役所に勤めていた国司たちが住む館も近くにあったはずですが、今のところ、その場所はわかっていません。しかし、府中第一小学校南側の寿町2丁目では「大目館」と墨書きされた土器が見つかっていますので、国司館の一つがこの付近にあったと想像できます。(F)

旧甲州街道



差し引かれた銭 —出土古銭をめぐって—

深澤 靖幸

百文は銭何枚だろう。100枚に決まっている？

—府中市宮西町で出土した渡来銭—

本誌17号の「最近の発掘調査から」で紹介したように、宮西町1丁目から4000枚に近い古銭が出土しました。すべて渡来銭で、戦国時代に何らかの目的をもって土中に埋められたものです。

中世において、銭を地中に埋めることは広く行われたようで、各地から出土の報告があります。北海道函館市志海苔町では37万4000枚以上の古銭が出土していますので、4000枚は決して多い数ではありません。

しかし、ここでは銭の孔に麻紐を通した状態で見つかっているの

です。その数40束。

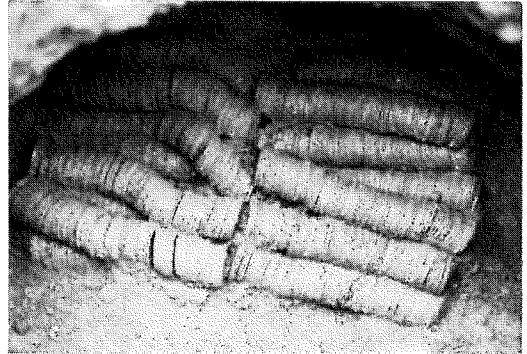
この束ねた状態をサシといい、1サシは百文です。したがって、4000枚の銭があるはずですが、ところが、土や錆を取り除き、1サシ毎の枚数を正確に勘定してみると100枚に満たないものが多く、枚数も一定せず、総数3890枚であることがわかりました。

—文献資料から—

奈良興福寺の僧侶の日記である『大乗院寺社雜事記』の文明12(1480)年12月21日条には、

料足アカマカ関ヨリ西八百文、東八百文九十七文目

と記されています。すなわち、赤間関(山口県下関)以西では百文は100枚ですが、これより東では97枚で百文として通用していたということです。



宮西町出土の古銭

私たちの常識ではちよつと考えられないことですが、銭100枚に満たなくても、百文として通用していたのです。こうした慣行を省陌法しやうはくぽうといい、鎌倉時代の中期以降、文献にその慣行がみえ、近世でも、引き続き行われていました。(小葉田淳『日本の貨幣』至文堂 1958年参照)

—出土例から—

さて、府中で見つかった40サシの内訳は、1サシ97枚のものが圧倒的に多く、上記の文献の記述を裏付けるものといえそうです。

1サシの状態が残り、その枚数を勘定できた例は減多になく、4例にすぎません(石井進『銭百文は何枚か』『中世史を考える』校倉書房1991年所収)。右表がその内訳で、広島県の草戸干軒町遺跡では97枚、青森県の浪岡城跡では100枚に集中しているのが目を引きます。新潟県の伝泉福寺遺跡の場合は95と97枚がやや多いといつてよいでしょう。すると、下関以東は97枚というほど単純なものではありませんが、細かな地域ごとに一定の取り決めがあったようにも見受けられます。

しかし、一か所から出土したのに、その枚数が一定しないのは、どうしたわけなのでしょう。また、100枚を越えてしまうのも不可解なことです。一括して、同時に埋められたものですか

宮西町出土古銭のサシ

| 1サシの枚数 | サシの数 |
|--------|------|
| 83 | 1 |
| 93 | 1 |
| 94 | 1 |
| 95 | 1 |
| 97 | 32 |
| 98 | 2 |
| 99 | 1 |
| 101 | 1 |

(ほか、サシから遊離したものの25枚。合計3890枚)

各地出土の古銭のサシ

| 1サシ の枚数 | サシの数 | | |
|------------|------|-------|-----|
| | 伝泉福寺 | 草戸千軒町 | 浪岡城 |
| 82 | | | 1 |
| 86 | | | 2 |
| 87 | | | 1 |
| 89 | | | 2 |
| 90 | | | 1 |
| 91 | | 1 | 4 |
| 92 | 2 | 4 | |
| 93 | | 3 | 1 |
| 94 | 2 | 2 | 8 |
| 95 | 7 | 3 | 3 |
| 96 | 4 | 4 | 15 |
| 97 | 7 | 11 | 67 |
| 98 | 2 | | 12 |
| 99 | 3 | | 3 |
| 100 | | | 1 |
| 101 | | | 1 |
| 102 | | | 1 |
| 103 | | | 1 |
| 104 | | | 4 |
| 106 | | | 1 |
| 107 | | | 2 |
| 119 | | | |
| 不明 | | 22 | |
| 合計 | 27 | 50 | 130 |
| | | | 52 |

ら、同じ地域で同じ時期に様々な値が百文としてまかり通っていたとしか思えないのです。

—なぜ、1サシの枚数が違うのか—

では、枚数の違う1サシが、どのような取り決めのもとに経済的に流通していたのか。1サシの重さが一定していたと想像することもできます。しかし、この時期、渡来銭と一口にいてもその実態は、中国製の基本銭とこれを真似て日本で作られた模鑄銭がありました。したがって、模鑄銭の割合が、1サシの枚数を決めていたと考えることもできます。小田原北条氏が発給した永録3(1560)年6月2日の印判状では、百文—97枚の内訳を精銭67枚、地悪銭30枚と定めていますので、この可能性は大いにあります。

とすれば、出土した銭が基本銭なのか模鑄銭なのかといった、さらに細かい観察も必要となりますが、この判別は難しく、簡単に結論を出せそうにもありません。

—埋める目的—

ここまで1サシの枚数についてみてきましたが、最後に、中世において銭を地下に埋める意味を探っておきたいと思います。一般に、銭の大量埋納は「備蓄銭」といわれ、室町時代を前後する時期に多く行われたようです。しかし、大量埋納の銭を字義通り、万一の場合に備えて貯えておく銭と理解するには問題が多すぎます。

香川県志度町の長福寺から明治年間に出土した約9000枚の銭には、

(表) 九貫文花嚴坊賢秀御房

(裏) 文明十二年三月十九日敬白

と墨書された木の札が添えられていて、文明12(1480)年に花嚴坊賢秀御房という僧侶が9貫文の銭を埋めたことは明らかです。さらに、最後の「敬白」の語は、神仏への願文などに用いられる言葉ですから、ここでは、9000枚の銭は何らかの祈願をこめて仏に進めたものと考えられるのです。

もう一つ、石川県の鶴来町では、

佛供箱/金劔宮行所方/天文廿四年十二月日と墨書された箱の中に約2万枚の銭が入っていたといいます。仏供箱が銭を納めるための箱に転用されたという見方もありますが、銭を仏に供えたと考えるのが自然ではないでしょうか。

府中で出土した銭が何のために埋めたのかは皆目わかりませんが、同じ発掘区からは密教法具である五鈷鈴の断片や六器の一部も出土していることが注目されます。

蛇足ですが、近年、平城京の長屋王邸から97枚の和同開珎がサシの状態で見つかり、省陌法が奈良時代から行われていた可能性も指摘されています。

カメラアシケル

— 秋色・郷土の森 —



▲小さい秋見つけた 唱歌を歌う会(9月20日)



▲秋の夜長に S・リップマン 〈ハープによる名曲の夕べ〉
(10月23日)



▲みのりの秋 こめっこクラブ稲刈り(10月25日)



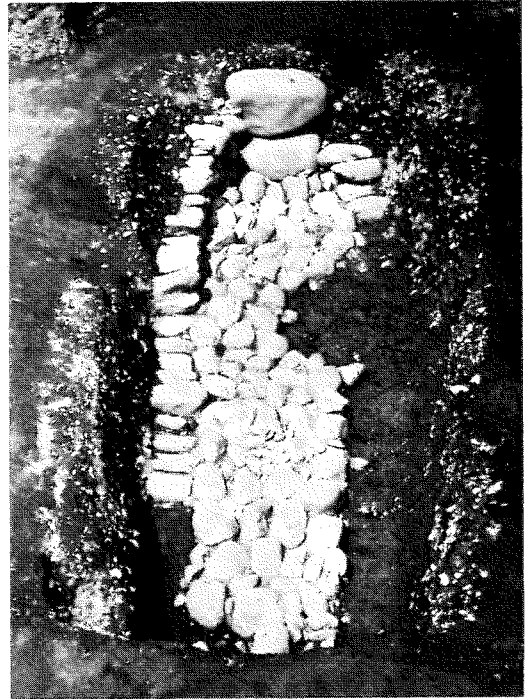
＝最近の発掘調査から＝

府中市では、奈良・平安時代の国府に関わる遺跡が数多く調査されていますが、これ以外の時代の遺跡もないわけではありません。今回は、白糸台で新たに見つかった古墳についてお話ししましょう。

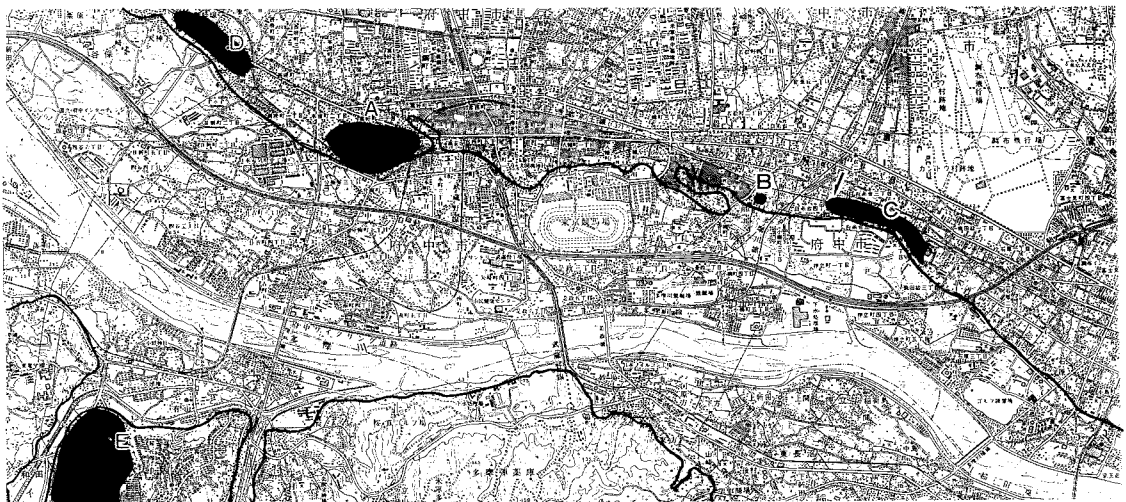
ところで、市内には何基ぐらいの古墳があると思いますか。今まで確実に古墳と確認したのは22基で、これを地域別にみると、分倍河原駅付近の高倉古墳群（下図A）で17基、多磨霊園駅の南側（下図B）で3基、武蔵野台駅から調布市に広がる^{しらいとど}白糸台古墳群（下図C）で2基（調布市側では5基）となります。さらに府中市の周辺には、国立市の^{しもやほ}下谷保古墳群（下図D）、多摩市の^{つかさばら}冨原古墳群（下図E）などがあります。これら古墳群の存在は近くに村があったことを想像させてくれますが、個々の古墳の規模が小さく、造られたのも古墳時代後期ですから、近くの村長たちの墓と考えられます。

今回、新たに見つかった古墳は2基で、ともに横穴式石室をもっていました。場所（矢印）は武蔵野台駅のすぐ南で、縄文時代の集石3基、^{うめがの}埋蔵3基、小竪穴1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒、墓1基なども見つかっています。

石室の構造は、本誌8号で紹介した高倉古墳群のものに似ています。しかし、2基とも残り^{かいらん}具合が悪く、壁になる河原石が盗掘か開墾によ



って抜き取られていました。しかも1基は石室の約1/3が調査区域外にあったため、全てを調査できませんでした。もう1基の方は、縦約5m、横約2m、深さ約1mの四角い穴に、河原石を積み重ねた側壁の一部と奥壁が残っていました。奥壁は一際大きな石を重ね、側壁の下の地面は石の形に掘りくぼめてありました。上写真の上半部が遺体を安置する玄室で、下半部が通路にあたる羨道になります。



古墳といえはぶつう高い盛土を想像しますが、盛土はすでに削平され、これをめぐる溝も発見されませんでした。しかし、奈良・平安時代の竪穴住居跡は石室から一定の距離がありますので、かつては直径10m程度の盛土をもった円墳

だったと思われます。

これまで白糸台付近では、あまり調査が行われていませんので、今後の調査によって古墳の数はさらに増える可能性があります。（白糸台・丸玉屋小勝ビル地区の調査から 和田）

あれこれ

虫たちの越冬

昆虫にとって冬の訪れは、言わば非常に厳しい季節の襲来です。寒さと乾燥は、春から夏にかけて野山で活動していた多くの仲間たちを、冷たい景観の中に閉じ込めてしまいます。種類の多い昆虫は、その生活形態の多様さに比例して、冬を越すためのスタイルもやはり多岐にわたっているようです。その代表例を紹介しましょう。

カマキリは、卵で冬を越す昆虫です。10月頃に枯ススキの茎や低木の枝などに、雌がおしりから出した粘液を泡立て、その中にバナナ型の卵を並べて産みこんでいきます。この泡が乾くと、スポンジのように弾力のある卵のうが完成し、中の卵を冬の寒さから保護し、かつ雨水の侵入を防ぐ手段となるのです。卵のうの形はカマキリの種類で異なり、産みつけられる場所にもある程度の違いがあるようです。

ミノムシは、その名のとおりミノガの幼虫で、蓑の中で冬を越す昆虫です。カマキリの卵のうと同様、やはり種類によって蓑の材料や形がそれぞれ違うようです。たとえばオオミノガは紡錘形の蓑で、公園の植栽樹などにつき、時に大きな葉が1枚つけられていたりします。チャミノガの蓑は、細い小枝を縦にびっしりと並べてつける形となっています。木の枝にぶらさがる大きな蓑の中に幼虫が入っているのはオオミノガくらいで、チャミノガなど、冬期の段階ではまだ幼虫が小さいその他の種類では、1cm以下の小さな蓑に隠れています。

成虫のまま越冬する昆虫では、多くの個体が集団で越冬するナミテントウ（テントウムシ）

が有名です。平均気温15℃前後になる風の穏やかな日に、越冬場所を求めて飛びたち、街中の建物の壁や電柱に止まります。面白い例は、たまにサッシのレールの隙間にびっしり入っている状況を見つけることでしょう。気温が低下する夕方になると、これらは地表に降り、石の下



などに落りこんで集団をつくります。集団で越冬する理由としては、この時期に単独越冬するよりも死亡率が低く、かつ春が訪れた時の交尾効率が良いことが考えられます。

卵、幼虫、成虫と、それぞれに異った形で越冬する昆虫の代表例を紹介しました。この他に卵で越冬する昆虫には、ガやバツタ類、幼虫で越冬するカブトムシ、セミ類、オオムラサキやゴマダラチョウ、集団越冬するクビキリギス、アカタテハ、キチョウなどが知られています。これら昆虫に代表される動植物の、自然と身についている巧みな生活の知恵は、まさに冬ならではの観察材料と言えるでしょう。（N）

あるむぜお 第22号

al museo イタリア語
“博物館で” “博物館にて” の意
発行日 1992年12月20日
発行 府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921